

滋賀短期大学卒業式式辞

平成 31 年 3 月 15 日

学長 秋山元秀

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。2年間というのは皆さんにとっては短い時間だったかもしれませんが、それでも2年前の4月から、学校でもまた学外でも、色々な経験をしてきたと思います。今日はそれを振り返って、友達や恩師の先生たちと、ゆっくり語りあえる一日になると思います。

次に卒業生たちを支えてくださった保護者の皆様、家族の皆様にも、心からおめでとうございますと申し上げます。今日の卒業式にあたり、立派に成長された晴れ姿をご覧になり、さぞかし感無量のことと存じます。これから社会に出てゆく卒業生は、現実の社会の中で苦勞することもあると思いますが、暖かく見守りながら、続けてご支援をいただければ幸いです。

また本日は多数のご来賓の方々にご臨席いただいております。日頃から本学を応援いただいておりますことに御礼申し上げますとともに、本日はとくに卒業生たちのためにご多忙の中をご来臨賜りまして厚く御礼申し上げます。これからは一社会人として、皆様のお世話になることもあろうかと存じます。その時にはこの人たちを一人前にするために、時にははげましたり、また叱ったりしながら、よろしくご指導いただきますようお願い申し上げます。

さて本日皆さんが卒業するに当たり、ひとこと贈りたい言葉があります。それは「初心忘るべからず」という格言です。実はこの言葉をめぐって考えたことは、今年入学する人たちのための学生便覧の序文に書かせてもらったのですが、その後もう一度考えてみると、この言葉は卒業生に贈る言葉としてぴったりとした意味をもっているのではないかと思うようになりました。

「初心忘るべからず」という格言はよく知られており、ありふれたことを言うと思われるかもしれませんが。一般には、ものごとを始めた最初の心がけを忘れないようにしろ、という意味に理解されていると思います。それは間違いではありませんが、もう少し深い意味があることを私も最近知りました。

この格言は、どこからきているかという、室町時代の初期、日本の伝統芸能の代表である能を大成したことで知られている世阿弥が、晩年になって能についての芸術論を記した『花鏡』という書物の中で述べている言葉なのです。世阿弥の能の理論書としては『風姿花伝』とという書物が有名ですが、『花鏡』は世阿弥が生涯を通じて会得した芸能論を記したものとして高く評価されています。その『花鏡』の最後に、自分の芸能論の結論を述べたところにこの言葉が出てきます。

その部分を要約すると次のようになります。

能というのは若い時から年を取るまでずっと学び続けなくてはならない。年を取るまで学ぶというのは、20代の若い時（これを初心とっています）から30代くらいまでは、それぞれの年代の力量に応じた学び方があり、40代くらいになると、力を少し抜いて軽やかに身を動かすやり方で学ぶことができるようになるという意味である。50代になると一見何もしていないように見えても実は本質を極めたような演じ方ができるようになる。

と年代ごとの学び方、すなわち能でいえば稽古の仕方、舞台での演じ方、また芸の極め方を述べています。そしてそれをまとめるように

初心忘るべからず、というのがわが流派のもっとも重要な格言であるが、これは三つの意味を含んでいる。それが「是非の初心忘るべからず」「時々の初心忘るべからず」「老後の初心忘るべからず」である、とっています。

最初の「是非の初心忘るべからず」というのは、いろいろな解釈があるようですが、未熟な時の心構えを持ち続けておれば、最初の時には間違っている、後になってわかってくるようになる、その意味での初心を忘れないでおれば、後になってから持つべき心構えもわかってくる、そうすれば一段上の段階に到達できるという意味のようです。

これは一般に理解されている初心忘るべからずに近い意味でしょう。しかし次の「時々の初心忘るべからず」と「老後の初心忘るべからず」にいう初心は、それだけではないようです。まず老後の初心というのはわかりにくいかもしれません。

人間には寿命があるから命はいつか尽きる、しかし芸能には終点というものはない。年を取ってから芸のありかたを会得するようになれば、そこで老後の初心ということがわかるのだとっています。それまで一生かけて勉強してきたことを、新しい気持ちで見直すことができるようになり、派手な動きで演じなくても、芸の奥義を極めることができるのだ、これが老後の初心なのだといっています。老後にも初心があるのなら、若い時から老人になるまでいろいろな年齢の段階があるでしょう。それが二番目の「時々の初心忘るべからず」という一句になるようです。

能に限らず、なにごとにも未熟な段階から完成に近づくまでいろいろな段階があり、少しずつ成長していくというのは、とくにあらためて言うまでもないことですが、そのそれぞれの段階にもつべき心がけを、初心ということばで表しているのが世阿弥のユニークな用語だろうと思います。一生初心を忘れないようにしろ、というのは最初の未熟な時の気持ちを忘れるな、という意味ではなく、それぞれの学びの段階に対して初心というものがある。それを会得することが一段上達することなのだと言っているのです。

今皆さんは2年間の学習を終えて、それを活かす場に出発しようとしています。卒

業は同時に新しいスタートでもあります。さきほどの世阿弥の言い方を借りると、皆さんが2年前に勉強を始めた時に心がけていたのが一つの初心ですが、今2年たってその時に思っていた通りのこともあれば、どうも違っていたということもあるでしょう。それを今振り返ってみて、何がよかったのか何がよくなかったのか、あるいは十分なものもあればどこか足りないものもあるでしょう。そういう判断ができるようになっていたら「是非の初心」がわかってきたということになります。しかしたった2年です。そして新しい人生はこれから始まります。実際に働き始めたら、何度も挫折したり、行き詰まったりするでしょう。その時に悩んで困しんでも、それを抜け出して新しい自分になったと感じた時、それがその時の初心、すなわち「時々の初心」なのです。皆さんは今から「老後の初心」を考える必要はありませんが、時々の初心を重ねていって成長していくことを是非考えてください。

初心についてはこれくらいにして、最後にお願ひがあります。先ほど言ったように、皆さんはこれからいろいろな場面でうまくいかないことに悩んだり、仕事でも人生でもつまずいたりくじけたりすることがあるでしょう。そんな時、頼りになるのが大学の時の友達であり恩師の先生たちです。もちろん職場の同僚や上司の人、また家族の人たちも相談する相手になってくれるでしょうし、有効なアドバイスをもらえるでしょう。しかし2年間一緒に学んだ仲間たち、一緒に学園祭で頑張った仲間たち、そういうつながりは本当に大事にしてほしいと思います。また勉強を学んだだけでなく、社会人として生きていくことを教えてくれた先生たちも、皆さんのことをずっと見守っていくつもりです。

皆さんには、この滋賀短にいたことによってできたネットワークを大切にしてほしいのです。滋賀短は来年2020年、創立50周年を迎えます。その時には大々的に卒業生の人たちすべてに声をかけようと思っておりますが、皆さんもぜひ母校に帰ってきて、母校の未来に向けての記念事業に参加してください。学校というのは今いる教職員や在校生だけではなく、卒業生たちの強いつながりに支えられて発展していかなくてはなりません。これから先、いろいろな機会にまた会える日を楽しみにしています。

では卒業生の皆さん、皆さんのこれからの新しい人生に心からお祝いを申し上げて式辞とします。